

ジャガイモと映画 (18)

<盗む (3)>

Web ジャガイモ博物館館長 あさ ま かず お
浅間 和夫

66 『エリザベス：ゴールデン・エイジ』

(原題：Elizabeth：The Golden Age)

2007年制作、2008年初公開のイギリス映画。監督：シェカール・カプール。

監督はかつてのイギリスの植民地インドの出身である。1558年、25歳の若さでプロテスタントのイングランド女王に即位したエリザベス 1 世 (1533-1603) がスペインの無敵艦隊を撃滅させて、当時弱小国だった同国の黄金時代を築き上げるまでの姿を描いたものである。1998年制作の映画『エリザベス』のその後のエリザベス 1 世を、同じスタッフとキャストで描いた。すなわち、その前作のあと、女王として辣腕^{らつわん}をふるう彼女が、やがて世界最強のスペイン無敵艦隊との決戦 (アルマダ海戦) に至るまでをまとめ、忍び寄る暗殺計画や生涯独身だったことから“バージン・クイーン”とも呼ばれた女王の禁断の恋なども織り交ぜ、盛りだくさんに描いた。

王位継承権が自分にあると主張するスコットランド女王メアリーの存在は脅威となっていた。そんなある日、エリザベスの前に、新世界から帰還したばかりの冒険家ウォルター・ローリーが現われる。やがて二人は交流を重ねるうち互いに惹かれ合い、“バージン・クイーン”を貫き通していたエリザベスの心は揺らぎ始める…な

ど。

詳しくは映画を見ていただくとして、ここではジャガイモについて触れることにする。映画の中のウォルター・ローリーがエリザベス女王にスペイン船からの略奪品を献上する際に、①ジャガイモ、②煙草の葉、③金貨の順に渡していた。何故ジャガイモがトップであったか。当時のジャガイモやタバコの葉は新大陸からもたらされる珍しいものであった。しかし金貨は女王にとってはありふれた略奪品でしかなかったことを語っている。

(註：ウォルター・ローリーと言え、水溜りに立往生した女王を前にし、自分が着ていたマントを女王の足元に素早く敷いたエピソードでも知られる男。また彼は、植民地建設の権利もらって渡米、ある土地に彼女にちなんだ名をつけた。それが現在のバージニア州であるとする説がある。)

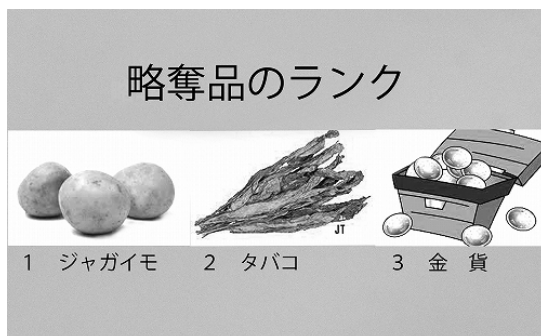


写真1 略奪品のランク

67 『火垂るの墓（ほたるのはか）』

（英題：Grave of the Fireflies）

1988年、邦画。監督：高畑勲。

野坂昭如^{あきゆき}の短編小説を映画化。野坂自身の戦争原体験を題材に、浮浪児兄妹が餓死するまでの悲劇を描いたもの。

太平洋戦争末期、現在の神戸市東灘区に住んでいた4歳の節子（畠山彩奈）とその兄である14歳の清太（吉武伶朗）は神戸大空襲で家も母（松田聖子）も失い、父の従兄弟の嫁（松坂慶子）で今は未亡人の家に身を寄せることになる。荷車に積んで行った缶詰などのお陰で家に置いてもらえるものの、やがて居心地が悪くなり、清太は節子を連れて防空壕の中で暮らし始める。しかし、孤児ふたりの食料は思うように得られず、節子は徐々に栄養失調で弱っていく。清太は少年が食べているりんごを奪ってきて妹に与えようとしたり、空襲で無人となった家から物を盗んだり、野菜を手に入れてくることもあった。

その後戦争は終わったものの節子は死ぬ。防空壕の前で茶^だ毘^びに付し、そこを去る。彼もまた栄養失調に陥り、死を予感するふらふら歩きで夕闇に遠ざかって行く…。原作のなかでは、清太の所持品に錆びたドロップ缶があり、その中には妹・節子の小さな骨片が入っている。駅員がドロップ缶を見つけ、無造作に草むらへ放り投げる。地面に落ちた缶からこぼれ落ちた遺骨のまわりに蛍が一頻り飛び交い、やがて静まる。

高畑監督も、兄妹が二人だけの閉じた家庭生活を築くことにはなんとか成功するものの、周囲の人々との共生を拒絶して社会生活に失敗していく姿は現代を生きる人々にも通じるものであると解説し、特に高校



写真2 吉武伶朗と畠山彩奈

生から20代の若い世代に共感してもらいたいと語る。

野坂昭如自身にジャガイモを盗む体験ある。また「宮本武蔵」、「新・平家物語」などで知られる小説家吉川英治にもこんなものがある。英治の父は一緒に会社を設立した人との裁判に負け、刑務所に入れられたりした。母は、女学校を卒業後、国学者宅に見習いに出るなど教養豊かな女性であった。結婚後は家政婦、店員、工員、船具工職人、給仕などあらゆる職について一家を支えた。英治も小学校を中退し、小僧奉公に出たり、店員、給仕などで、母を助けていた。

ある晩のこと、食べるものが無くなり、母が台所で放心状態になっていた。それを見た少年英治は、近所の『ジャガイモ畑にわけ入って、ジャガイモを掘りだしてきた…。これは、『忘れ残りの記』のくだり。畑の向こうには、希望したけど貧乏のため入れなかった県立一中の校舎が見えていた。彼の川柳に、こんなものもある。

『貧しさもあまりのはては笑い合い』

68 『ドイツ零年』

（原題：Germania anno zero）1948年、

イタリア映画。監督：ロベルト・ロッセリーニ。

第二次世界大戦直後、廃墟のベルリン、350万人が飢えと絶望の中に置かれた。モノクロ字幕に「…イデオロギーの変更は犯罪と狂気を創り出す。それは子供の純真な心までも」とあり、観る人に予感が授けられる。

12歳の少年エドモンド・ケーラー（エドムント・メシュケ）はまだ15歳に達していないことがバレて「仕事泥棒」といわれ、仕事から外される。父、母、姉、それに兄と暮している。父は病弱で家族の足かせになり、「死にたい」という言葉を繰り返している。姉エヴァは夜のキャバレーに出かけ、家計を助けているが、兄カールは元ナチ党员であることが発覚することを恐れ、定職につかず、家族の生活レベルを下げている。エドモンドは収入の乏しい一家にとって貴重な働き手になろうとしている。

エドモンドは、街でかつて小学校の担任だった元ナチ教師エニング（エーリッヒ・ギュネ）と再会する。今はヒトラーの演説を録音したレコードをヤミで連合軍兵に売りさばく仕事をしており、少年に仕事を与えてくれる。そしてエニングが束ねる窃盗団のボス、ジョーとその恋人のクリステルに預けられ、裏商売を知っていく。

家主に頼まれ秤を売りに出かけるが、悪事を知るきっかけくらいにしか役に立たない。ジョーの仲間がジャガイモ列車が夜に



写真3 ジャガイモ列車が着くぞ

着くことを知らせに来る（写真）。3人でジャガイモ1袋ほどを盗むことができ、両手で1回ほどの分け前を得る。

泥棒仲間と過ごして朝帰りしたことを父に叱られる。その父の病気が悪化したが、医者のお骨折りで慈善病院に入院でき、彼は病室の父を訪ねる。父は相も変わらず「死にたい」などと嘆くばかり。数日して父がアパートに帰ってくる。しかしスープも茶も牛乳もない食卓を見て、病院の方が良かったと文句を言う。教師のナチス流弱肉強食、優性思想などに洗脳されていたエドモンドは、一家の窮状を救い、父の望みをかなえてやるため、ついに劇薬入りの紅茶を飲ます。父の柩を運んだ車を廃墟のビルから見送っていると、姉と兄がエドモンドを呼んでいる。彼は見つからないよう隠れ、ぼんやりと向かいのアパートを見つめ、ついに建物から身を投げてしまう……。ドイツの零から再出発状況の混沌として満たされぬあり様を見せたものである。